

愛し恋人のいない夜

成人向

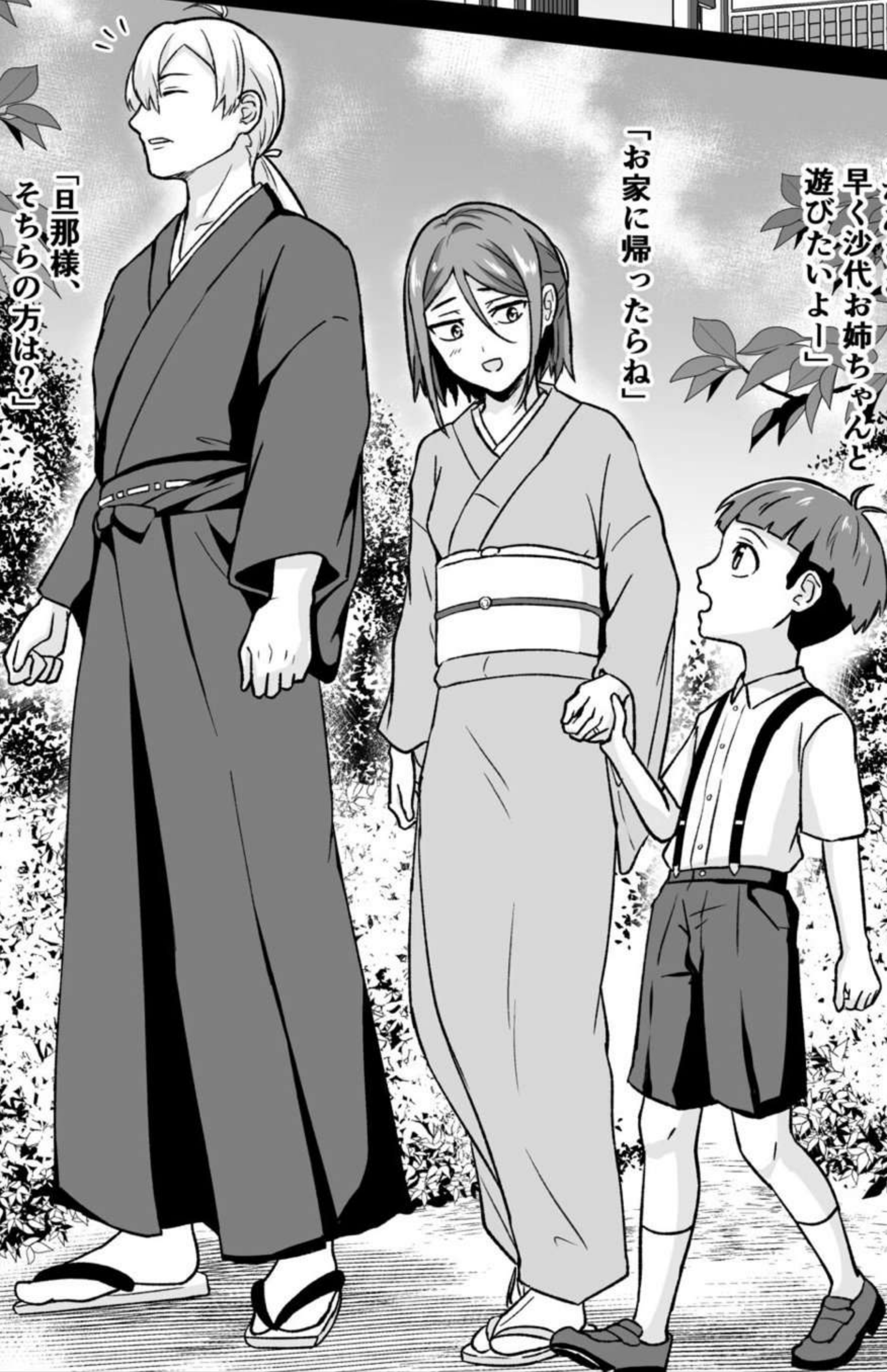




「かあさまー、早く沙代お姉ちゃんと遊びたいよー」

「お家に帰ったらね」

「旦那様、そちらの方は？」



「ああ、彼は会社の取引で
世話になっている子だよ」

「帰りの列車が無くて
一晩泊まるから
寢床を用意して
やってくれ
くれぐれも
失礼の無いようにな」

身体が大きくて
怖い雰囲気の人…

あまり
関わりたくないわ…

「まったく、また突然
東京のモンを
村に入れるなんて
迷惑したらないよ」

「庚子、あなたのとこの
部屋を貸してやりなさい」

「えっ…ですが
お姉様…」

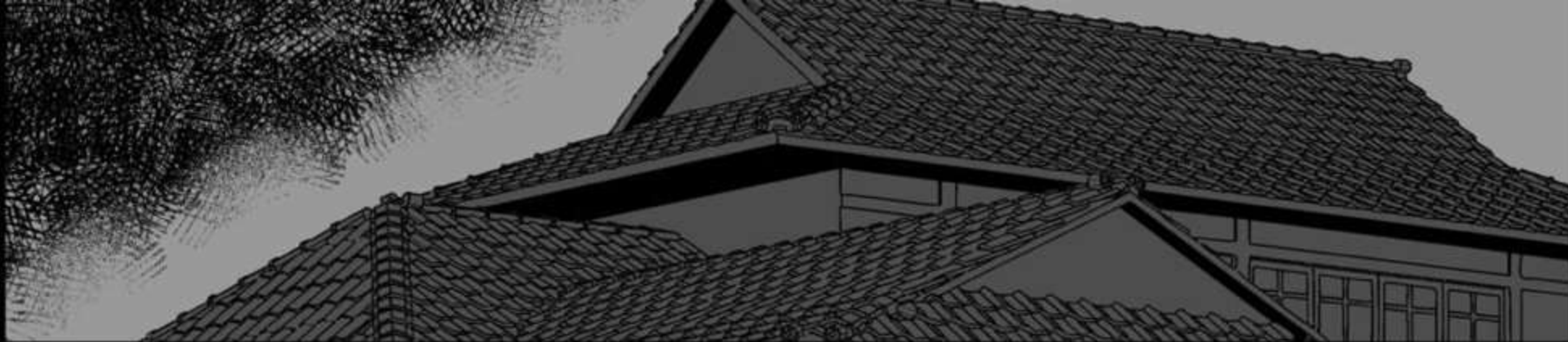
トキッ

「余所者を龍賀の屋敷に
長々と居させるわけには
いきませんから。
分かるでしょう長田？」

トキッ

(克典さんの
お客人なのに…)

(私が三女だからって…
いつも私ばかり
いいように使われる)



「久々に幽霊族が現れたそうです何でも、血を大量に精製出来る見込みのある大物だとか」

「幽霊族はすべて狩りつくしたと思っでいましたが一体どこに潜んでいたのでしょうか」



「とはいえ裏鬼道の勤めとして出ないわけには参りません」

「大丈夫なるべく早く帰りますよ」



「でも…こんな夜中に東京からのお客人がいる時に私と時弥だけでは……」

深夜——



「え、ええ…
ご案内します」



「庚子さん、
厠はどちら
でしたっけ？」



昼間に
教えたのに

それならあえて
離れの厠を
案内しようかしら



「ごちらになりま……」

カッパ

「どうですか!?」
おつもりですか!?

「……」
幽霊族と妖怪を見紛う
罫を仕掛けておいて
よかったぜ

カッパ

カッパ

「あの強そうな
旦那のいない隙に
この熟れた身体を
独り占め出来る!」

「嫌あつ!
だ、だれか!
助け……!」

「おっと、騒いだらどうなるか
分かるよな?
俺に従わないと……お前ら
龍賀一族の秘密をバラす
……ッ!」

カッパ



「安心しろ
今晚だけ、時貞への奉仕と
同じ事を俺にすればいい」

(この男……何故
お父様とのことを
知っているの!?)



(ち、窒息しそう……!!
でも呼吸をしようと……)



んちゅっ♡べろっ♡
しっ♡しっ♡しっ♡

(嫌ああっ!! どうしてこんな、
見ず知らずの東京の男と
デーブキスなんか……ツ!!)



(この男の唾液を
飲んでしまう……っ)

「キスの次は
フェエラな？」

「う……っ」

(私の顔ぐらいある……)

こんなのを
相手にしないと
いけないの……!?)

時

わっ

む

時

「ほらっデカチンポだぞ
ジジイの時貞より
デカくて太くて
硬いんじゃないか？」

「ポーっとしてねえでさ、
父親にやってたのと
同じように」

射精するまでシャブれよ」

吐き気が
するほど
嫌だけど……

逆らえない以上
一度射精させて

満足させて
終わらせる
しかない……

「んっ♡ちゅぽっ♡
ちゅっぽ♡ちゅぶっ♡
ちゅるるっ♡ぐぽっ♡
んぶっ♡おぶっ♡ちゅ♡」

グ

グ

「ほお、大人しそうな顔をして
下品なフェエラするじゃねえか！
流石、長らく父親の肉便器を
やっていただけある♪
だがもつと喉奥を使っただな……」

ちゅるるるるるるるるるる
ちゅるるるるるるるるるる
ちゅるるるるるるるるるる
ちゅるるるるるるるるるる



「オラッ!!
喉マンコに出すぞ!!
よそ者のザーメン全部飲め!!」

「んぶうつ?! んぢゅつ♡
ぢゅつ♡ぢゅつ♡
ゴクッゴクッ……♡」

(や、やっぱり
知らない男の精液を
全部飲むなんて、無理……!)



(うそ……まだやるの!?)



「けほっけほっ! うん……っ」
(口の中……喉奥も……ドロドロの
精液のニオイでいっぱい……っ)

「全部は飲み切れなかったか
まあ仕方ない
吐き出したぶんは
マンコを使わせてもらおう」

ケホッ

ケホッ

「そ、そこだけは、
勘弁して下さい……！
せめて手や口だけで……！」

「あ？回答えすんなよ
時貞は死んだし
旦那も大して
使ってねえだろうし
ご無沙汰だろ？」



「俺のチンポはデカすぎて
入らない女もいるからな
多少使用済みの
経産婦人妻マンコの方が
かえって丁度いいんだ」

「お尻の穴……!?
そんなの
変態じゃない……っ♡」

「そういえば……
時貞はアナルはあまり
使ってなかっただろ？」

「マンコの後には
アナルも
犯してやるからな」



「おおっ、肉便器の
人妻マンコの割には
締まりがいいじゃねえか！
しつかり巨根チンポに
膣肉がまとわりついて
精液搾り取るうと
してるぜ？」

「お父様が亡くなったって……
もう身体を捧げることなんて
ないと思っていたのに……う
こんないよそ者の男根に
膣内ナカもてあそを弄ばれるなんて……う

「サ、サシ
外に出クンとわっつ
膣内はダメ……う」

「おっ♡なな♡うっ
ないっ……んああ♡
イヤですっ♡♡」

「はっ……
マンコに出すに
決まってるだろ
ガキ孕ませてやるわ」

「いやあああああ
他所の男の精液でっ
孕みたくないっつっ!!
やめてっやめてえっ!!」

「オラッ!一番奥に!
子宮に出すぞ!
孕んでも知らねーよ!」



「うっ……♡
はあ……はあ……ああ♡」

「ふう~~~~~」

あまりにエロくよがるから
つい大量射精しちゃったわ
わりいわりい」

「ひ……び……び……
あう……うう……♡」

「ヒロ……ッ」

「もう終わりに
して下ろし……
誰にも
言いませんから……」



「いやあ 精液垂れ流しの
人妻マンコ見てたら
勃起おさままんねーよ！
次は孕まないように
アナル使うからな！」

(ひい……！もう嫌っ！！
一体いつまで続くの……!?)



「ねえ、
誰か返事して？」
「漏れちゃうよお」

カッ
コッ



「誰か入ってるの？
僕、おしっこしたいんだけど…」

時弥…っ!?
どうして
こんな時に……



（ほらっ
振り向いてやるから
何か喋って追い払えっ）



（どうしよう……
早く立ち去って
くれないかしら……）

「だ、ダメ……っ♡
オマンコから精液垂れ流してっ♡
アナルにピストンされながらっ♡
息子と喋るなんて……っ♡」

「絶対につ♡
スケベな声
出ちやう……っ♡」

あれ？
母様の声が
聞こえた気が…

（母親の下品な
不倫セックス♡
バレちやう……っ♡）

「オイオイこの女、
感じすぎて
頭が真っ白に
なっているのか？
チツ仕方ねえな……」

「時弥くん、
こつちの便所は
調子が悪いみたいなんだ
いまおじさんが直してるから
反対側のもう一つの廁を
使ってくれるかい？」



「あれ？
お客さんのおじさん？
そうなんだ……」

「分かった！
向こうを使うね
どうもありがとう！」

「すまないねえ
……フンツ！
フツ！フツ！」



ビクッ

「はあ…はあ…っ
あつ…♡ああ…♡

ハッ
ハッ

「これでアナルも
チンポケースとして
開発完了っ」と

「この漏れたザーメン
もうマンコのやつか
アナルのやつか
分かんねえな」

「も…もう…
無理…♡」

ドボ

ドボ

「あーまた淫乱人妻マンコに
入れたくなつちまったから
キンタマ枯れるまで
マンコとアナル交互に
ハメてやるわっ」

いっ
いっ
いっ

「ああ…♡ダメな…♡
もう…イキすぎて…♡
ゆ…ゆるしてる…♡」

おはよう

おはよう

おはよう



「ふうー…
エロ女過ぎて
つい夜明けまで
ヤッチまった」

「旦那が帰る前に
終わりにするか
…ん？」

ジャ
ジャ

チュン
チュン…



「うおっ！
アナルとマンコから
精液垂れ流しながら
小便かよ！ギャハハハ！
真正正銘の便器女だな
それでも良家の娘か！」

おはよう

ビロ…

アアア

後日――

「おお、庚子さんか
私なんか一体
何の用かね？」

「先日いらしたお客様、
ハンカチを
お忘れになったのです」

「ハンカチ？
そんなもの黙って
捨ててしまえば
良いではないか」

「いえ
大切な物かも
しれませんので」

どうしても

ご連絡を
差し上げたくて

■奥付

誌名：愛し恋人のいない夜

発行日：2023.12.30

発行者：ハンガー反射／温泉川よそ見

連絡先：hanger_reflection@yahoo.co.jp

twitter：@yunokawa_yosomi pixiv:187153

印刷所：金沢印刷様

お手に取って頂きありがとうございました！

ハンガー反射